

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：16301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13167

研究課題名(和文) ソーシャリー・エンゲイジド・アートとしてのダンス：その理論と実践の探求

研究課題名(英文) Dance as socially engaged art: research for theory and practice

研究代表者

越智 雄磨 (OCHI, YUMA)

愛媛大学・法文学部・講師

研究者番号：80732552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、歴史的事例として、1960年代に「デモクラシーの身体」を出現させたと言われるアメリカのポスト・モダンダンス及びそれに連なる系譜についての研究を行い、その知見を基に、「社会を創造するムーブメント」として昨今注目され始めている「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」としてこれらのダンスを再文脈化することを目指した。日本の複数のケースを考察することで、直接的な政治イシューを扱うのではなく、参加者の身体感覚への内省や規律訓練を相対化するダンスのプロジェクトにはより根源的な政治性や社会性が宿る可能性を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

理論研究だけではなく、芸術家と協業して観客の「参加」や参加者との共創の可能性を実践的に探ることを目的とした本研究は、作品を美的に評価する美学的な研究であるだけではなく、実践から創作の方法を考えるポイエシス(制作)の研究でもある。2017年度はパフォーマンスグループ「コンタクト・ゴンゾ」、2018年度は演出家長谷川寧、2019年度は振付家/研究者である児玉北斗氏に協力を得て、観客が参加するタイプの作品の創作と公演、あるいは一般公募によるワークショップと参加者による公開試演を行なった。本研究によって、通常、美学的対象として考察されるダンス作品の「社会関与」や政治性について考察する可能性を開いた。

研究成果の概要(英文)：In modern times, there is a trend to evaluate art based on social and ethical criteria rather than artistic and aesthetic criteria. In particular, in the creation and criticism of contemporary dance and contemporary art since the 90s, whether or not the work creates a "democratic" relationship or community is one of the criteria for distinguishing the superiority or inferiority of the work. The purpose of this research is to study the postmodern dance of the United States, which is said to have emerged "the body of democracy" in the 1960s, and the genealogy linked to it as a historical example. We aimed to recontextualize these dances as "Socially Engaged Art," which has recently started to attract attention as a "movement to create the society."

研究分野：舞踊学、美学、芸術学

キーワード：コンタクト・ゴンゾ 長谷川寧 児玉北斗 参加型芸術

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は1990年代半ばからコンテンポラリーダンスの領域で活躍しているジェローム・ベルやグザヴィエ・ル・ロワなど欧米やアジア諸国で評価されてきた振付家の作品の意義について研究してきた。その過程で、「民主化」「民主的」という価値観が彼らの作品の正当性を評価する上で重視される傾向があることがわかった。舞踊史的観点からみれば、上に挙げた振付家たちは、1960年代に公民権運動などと同時期に興り「デモクラシーの身体 (democracy's body)」を出現させたと言われるアメリカのポスト・モダンダンスの影響を受けており、その理念や方法を現代にアップデートしていると考えられる。また美学的観点からみれば、1990年代以降の先に挙げた振付家たちの作品には、観客とのコミュニケーションや「民主的な関係」を重視しているという特性があり、その理論的背景には、ニコラ・プリオアの『関係性の美学 (*Esthétique relationnelle*)』があると言える。プリオアは芸術の価値が、「作者」の創造する「作品」に内在する理念に宿るのではなく、作者と観客との対等な「対話」や「交渉」を通じて作品の社会的価値が多様に生じうるといふ芸術の価値を巡るパラダイム・シフトについて論じているからである。ここでは観客は「鑑賞者」というよりも「参加者」あるいは「共作者」として捉えられており、上述したようなコンテンポラリーダンスの振付家の作品の一部はこの傾向と一致すると考えられる。

作品中での観客とのコミュニケーションを重視したり、特にプロフェッショナルの訓練を受けていない一般の人々をダンサーとして包摂したりするコンテンポラリーダンスの実践は、「芸術的」な実践であると同時に、社会に対する働きかけ（社会的実践）であることを重視する「ソーシャリー・エンゲイジド・アート (Socially Engaged Art、以下、社会関与型芸術)」に接近していると言える。

2. 研究の目的

上にみたように、現代において、芸術的・美的な評価基準というより、社会的・倫理的基準から芸術を評価する動向が存在する。とりわけ、90年代以降のコンテンポラリーダンスや現代アートの創作と批評において、その作品が「民主的」な関係やコミュニティを生成しているか否かが、作品の優劣や成否を峻別する一つの基準となっている。本研究の目的は、歴史的事例として、1960年代に「デモクラシーの身体」を出現させたと言われるアメリカのポスト・モダンダンス及びそれに連なるダンスの系譜についての研究を行い、その知見を基に、「社会を創造するムーブメント」として昨今注目され始めている「ソーシャリー・エンゲイジド・アート / Socially Engaged Art (社会関与型芸術)」としてこれらのダンスを再文脈化し、その理論と実践の先端を切り開くことを目的とする。

3. 研究の方法

社会関与型芸術についての研究を行うと同時に、政治的運動と軌を一にした1960年代のアメリカのポスト・モダンダンス及びその影響を受けた現代のダンスを対象として、歴史・理論研究を行い、コンテンポラリーダンスを社会関与型芸術として位置づけなおし、それが社

会に果たす可能性について検討するという方法をとった。また、当初の予定では、そのような理論研究後に、芸術家と協働し、その研究成果をワークショップなどを通して一般公開し、実践の可能性を検証することになっていたが、実際に研究を過程で、理論研究と芸術家との協働を並行して進めることになった。

平成 29 年度にはコンタクト・ゴンゾに《訓練されていない素人のための振付コンセプト 001/002/003》の創作と実施を依頼し、2019 年度には妙高市文化ホールと共同で演出家の長谷川寧氏に《Attack On Dance》を妙高市の参加者とともに創作を依頼した。また、2020 年度にはダンサー／振付家の児玉北斗氏に同じく妙高市の子供を対象としたワークショップと作品《ねむれないよのうた》の創作と公開を依頼した。各年度に異なるアーティストによる異なる対象の作品の参与観察を経て、ダンスにおける参加の形態についての考察と、様々な社会関与の可能性を検討した。

4．研究成果

本研究では、ポストモダンダンスが日常的なダンスやデモクラシーの身体を称揚し、実践しようとしていたことや、そのメンバーが政治的な活動に関与していた事実を踏まえ、ポストモダンダンスが芸術的実践であると同時に政治的な実践でもあったことを見出した。ポストモダンダンスが歴史上そのように呼ばれたことはないが、「社会関与型芸術」の性質を持ち合わせていたと考えられる。次いで、ポスト・モダンダンスと同様に日常の身体と参加可能性がその争点となる作品を作っている日本のアーティストの試みに焦点を当てた。結果としては、日本人のアーティストによる芸術というフレームの中での観客の参加のモデルを試行した事例を対象としたことで、欧米における直接的な政治課題を扱う「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」とは厳密な意味で異なるものの、ダンスという芸術独自の社会性や政治性を思考するための特徴および論点を別様に考えることができたと思う。複数の事例を通じて共通して抽出することができた論点は、「反-解釈」「脱 作品／無為」「キネステーゼの喚起」「愛好者／素人の美学」の4つである。

「反-解釈」は哲学者スーザン・ソンタグから、「脱 作品」は美学者フレデリック・パイヨードから着想を得た論点であるが、直接的に政治的な問題を扱わないとしても、この二つの論点から近代美学において確立された「作品」という概念から逸脱しようとする傾向がこれらの特徴が浮き彫りにされた。また、それに関連して、旧来の作品に固有の特徴として見られる作者のメッセージや物語などの内容を明示することに注力するのではなく、よりニュートラルに参加者のキネステーゼ(運動感覚)をそれぞれ方法異なる方法で喚起していることが判明した。そこでは参加者の身体の配置や参加の度合いが問題となるが、プロのような表現の巧みさが問題ではなく、ロラン・バルトが愛好者／素人(amateur)に見出した存在の優雅さに焦点が当てられる。これらの点が政治性を持つといえるのは、それが例えば伝統的なバレエ団における高度なテクニックを持ったプロのダンサー達によって実現される「作品」という近代的概念を相対化するだけではなく、ミシェル・フーコーが身体を貫く権力の「ミクロメカニズム」と呼んだ我々の個々の身体に浸透した「規律訓練(discipline)」を相対化することができるからである。したがって直接的に政治的イシューを扱わない芸術についても、より根本的な政治的・社会的意義を見出すためことができた。こうした観点からソーシャリー・エンゲイジド・アーティストという概念を捉え返し、短期的な政治的イシューだけではなく、長期的あるいはより根源的な存在をめぐる政治と美学の争点を加えて、この概念の定義の拡張が可能かどうかという次なる、考察課題も見

出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 越智雄磨、松澤慶信、桜井圭介、武藤大祐	4. 巻 vol.74
2. 論文標題 コンテンポラリー・ダンスの起源と展望	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 DDD (dance dance dance)	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 越智 雄磨	4. 巻 vol.74
2. 論文標題 「ノン・ダンス」以後—フランスにおけるコンテンポラリーダンスの展開	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 DDD (dance dance dance)	6. 最初と最後の頁 17-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 越智雄磨
2. 発表標題 他者との遭遇—ロマンティック・バレエからストリートダンスまで
3. 学会等名 公益財団法人妙高文化振興事業団 / 妙高市文化ホール（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 越智雄磨、外山紀久子、桜井圭介、塚原悠也、三ヶ尻敬悟、松見拓也、NAZE
2. 発表標題 『訓練されていない素人のための振付コンセプト』について
3. 学会等名 Buoy北千住アートセンター
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 越智雄磨
2. 発表標題 Who Dance? 振付のアクチュアリティ
3. 学会等名 横浜ダンスコレクション2017 (公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 越智雄磨、児玉北斗
2. 発表標題 「MYOKO SKOOL -ダンシング・モンスター! 越智雄磨セレクションvol.2」『ねむれないよるのうた』をめぐって
3. 学会等名 公益財団法人妙高文化振興事業団 / 妙高市文化ホール (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考